



Title	The Mismatch Phenomena between Meaning and Form in Japanese and English
Author(s)	岩崎, 真哉
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59385
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	岩 崎 真 哉
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 8 6 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 8 月 17 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	The Mismatch Phenomena between Meaning and Form in Japanese and English (日英語における意味と形式のミスマッチ現象について)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大庭 幸男 (副査) 教 授 岡田 慎之 教 授 加藤 正治 教 授 神山 孝夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日英語において見られる意味と形式のミスマッチ現象を議論したものである。全体は 6 章からなり、総頁数は英文にて A4 判 209 頁 (400 字詰め原稿用紙に換算して約 620 枚に相当する) である。

第 1 章では、本論文で議論する意味と形式のミスマッチ現象について概略し、その具体的な事例として同族目的語構文、時間副詞表現、used to (be) 構文を提示する。また、本研究が立脚する認知言語学や構文文法について、その理論的背景や理念等を概観する。

第 2 章では、本論文が基盤とする認知言語学と構文文法の諸概念を提示する。特に重要な概念として、主体性と文法化を取り上げる。前者は、グラウンド (発話者) が叙述スコープに入るか否かによって決定される。また後者は、語彙項目や構文が文法関係を表すマーカーになることを意味する。

第 3 章では、同族目的語構文を取り上げ、この構文にはどのような動詞が生起可能であるかについて議論する。特に、同族目的語を、主語が発するエネルギー、主語の (目的語に現れる) 状態変化、目的語の対象性というパラメータで分類し、これらのパラメータを用いて同族目的語構文に現れる動詞の認知構造を提示する。具体的には、主語が発するエネルギーは、非能格動詞と非対格動詞の区別に関与し、主語の状態変化と同族目的語の対象性のパラメータは、非能格動詞の分類に関係すると主張する。また、同族目的語の対象性は、「動詞によって表される行為が、メタファー的であっても、主語から分離可能であるなら、同族名詞句は動作の対象として捉えられる」と規定する。

第 4 章では、時間副詞表現を取り上げ、特に時間メタファーの観点から議論する。まず先行研究 (Moore 2006) を検討し、時間メタファーは、ものごとを主体的・客体的に捉えるという人に備わる認知能力 (以下、これを主体的・客体的把握と呼ぶ) の観点から分析すべきであると主張する。特に、時間メタファーを主体的・客体的把握と直示性・非直示性の観点から分類し、それによって日英語に見られる時間メタファーの統一的な説明が可能になるこ

とを示す。具体的には、日本語の「まえ」を含む時間表現と「さき」を含む時間表現には容認性の違いがあり、Moore のモデルではこれを捉えることができないことを指摘し、本論文で提案する主体的・客体的把握と直示性・非直示性による分析では適切に説明されると主張する。

第 5 章の前半では、準助動詞 used to を取り上げ、その機能と特性について考察する。まず、コーパスの調査結果に基づき、used to の主語はその表現が使用されるジャンルにより人称や有生・無生に違いが見られることを指摘する。さらに、used to が表す習慣性と状態性を検討し、used to は期間を表すマーカーの for と類似し、過去のある時点に終点を加えることを主張する。また *OED* の調査結果に基づき、used to と be の共起頻度が高いことを通時的に指摘する。

第 5 章の後半では、used to be 構文が副詞的に使用されるという事実をコーパスの調査結果から指摘し、その発現理由を提示する。具体的には、used to be 構文の発現は、トークン頻度、有用性、認識様態性を中心とするネットワークに基づくことを主張する。特に、used to be 構文が used to から継承していない独自の機能として、聞き手の注意を引き付ける働きがあることを指摘する。

第 6 章ではこれまで行った議論を総括する。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日英語に見られる意味と形式のミスマッチ現象を認知言語学と構文文法の枠組みを用いて分析したものである。取り上げる事例は、同族目的語構文、時間副詞表現、used to (be) 構文である。本論文の意義は、日英語に見られる一連のミスマッチ現象が人間の認知能力の観点から説明されうる可能性を示したことにある。たとえば、同族目的語構文では、この構文に生起する動詞を 3 つのパラメータ (主語が発するエネルギーの有無、主語の状態変化の有無、同族目的語の対象性の有無) によって分類し、語彙的なスキーマを利用することによって、非能格動詞はこのスキーマを具現化したものとして捉え、非対格動詞はこのスキーマから拡張されたものと捉えている。それにより、動詞の種類によって生じる同族目的語構文の受動態の可否や同族目的語の代名詞化の可否、そして同族目的語に対する修飾語の必要性の有無などの違いを、説得力のある方法で無理なく説明している。また、時間副詞表現では、当該の時間表現を主体的・客体的把握と直示的・非直示的な観点から分析している。その結果、「まえ」と「さき」に認められる時間指示関係の可能性の違いを、グラウンドの配置のあり方に求めることで、可能な時間表示の組み合わせを論理的に導き出している。さらに、used to 構文では、この構文が表す習慣性と状態性は「同一性」を共有する連続体を構成するものとして捉え、used to それ自体は過去のある時点に終点を加えるマーカーであることを主張している。それにより、used to が状態動詞や時点を表す副詞と共起できることを統一的に説明している。また、used to be 構文では、この構文に認められる副詞的な用法を、単独の用法として孤立させず、他の認識様態性のマーカーと意味的、形式的に関連づけることにより、この言語変化の有り様を有機的に捉えようとしている。加えて、used to be 構文がどのように成立したかを推測した過程は、鋭い観察に基づいており大変興味深い。

しかし、本論文には問題がないわけではなく、実際に取り上げたケースにおいて提示された説明方法の有効性はやや限定的であることが否めず、採用した想定等に今後補正を要する

ところが見られる。たとえば、同族目的語構文の統語的な特徴を認知言語学や構文文法の手法で説明しているが、提示されている事例には事実と異なるものがいくつか含まれている。したがって、本論文の説明方法に若干の手直しが必要であろう。また、時間副詞表現では、「より」句との組み合わせによって、本来 **on stage** に置かれるべきグラウンドが、何らの不都合を生じることもなく **off stage** に移行させることができるのは何故か、という点についても補足的な説明が必要であろう。さらに、認識様態性のマーカーの中で **used to be** 構文と同じ、もしくは類似する発展過程をたどっている他の要素にどのようなものがあるかについても調査する必要があるだろう。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。